

博 多 69

- 博多遺跡群第103次発掘調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第627集

2 0 0 0

福岡市教育委員会

博多 69

—博多遺跡群第103次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第627集



遺跡略号 HKT-103
遺跡調査番号 9754

2000

福岡市教育委員会

卷頭圖版 1



廣東白磁皿

卷頭圖版 2



木造仏手

序

古くから大陸文化の門戸として栄えた都市遺跡「博多」の発掘調査は近年の都心部の再開発に伴い、現在までに120次を越え、調査の進展とともに新たな知見が得られています。

本書は博多総鎮守横田神社共同住宅併用駐車場建設に伴って実施された第103次調査を報告するものです。調査では往時の地割りを画していた溝が多時期にわたって検出されるとともに多数の特に広東系の輸入陶磁器、寺院の存在をほのめかす瓦や木造仏手が出土するなど、多大な成果を収めることができました。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から資料整理にいたるまでご理解と費用負担などのご協力をいただいた施主の横田神社宮司阿部憲之介氏、発掘調査にあたっての諸々の条件整備に尽力された株式会社竹中工務店の方々を始めとする関係各位に対し、心から感謝の意を表する次第です。

平成12年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 西 憲一郎

例　　言

1. 本書は、福岡市博多区冷泉町における共同住宅兼駐車場建設に伴い、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成9(1997)年度に発掘調査を実施した博多遺跡群第103次調査の報告である。
2. 本書に掲載した遺構の実測・製図、撮影は福岡市教育委員会埋蔵文化財課の佐藤一郎があたった。
3. 本書に掲載した遺物の実測は第10図の一部を古閑真理子、吉田恵美が行った他は佐藤が行い、製図、撮影は佐藤があたった。
4. 本書の執筆・編集は佐藤が行った。
5. 本報告の記録類、出土遺物は収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので、活用されたい。

調査番号	9754	遺跡略号	HKT-103
調査地地籍	福岡市博多区冷泉町2番	分布地図番号	天神49
開発面積	1,314.8m ²	調査面積	72m ²
調査期間	1997(平成9)年12月8日～2月28日		

本文目次

I はじめに.....	1
1. 調査にいたる経過.....	1
2. 調査の組織.....	1
II 遺跡の位置と環境.....	1
III 発掘調査の概要.....	4
IV 遺構と遺物.....	4
1. 検出遺構.....	4
2. 出土遺物.....	8

表 目 次

第1表 出出土器計測表.....	20
------------------	----

挿図目次

第1図 博多遺跡群発掘調査地域図.....	2
第2図 博多遺跡群第103次調査地域周辺図.....	3
第3図 博多遺跡群第103次調査壁面土層図.....	5
第4図 博多遺跡群第103次調査遺構配置図.....	6
第5図 S D01出土遺物実測図.....	7
第6図 S D02・04, S E06, S K11出土遺物実測図.....	8
第7図 S D07出土遺物実測図.....	9
第8図 S D08出土土器実測図.....	10
第9図 S D08出土陶磁器実測図（1）.....	11
第10図 S D08出土陶磁器実測図（2）.....	13
第11図 S D10出土遺物実測図.....	14
第12図 包含層、その他の遺構出土遺物実測図.....	17
第13図 瓦実測図.....	18

図版目次

- 図版 1 (1) 博多遺跡群第 103 次調査 II 層上面全景 (北西から)
(2) 博多遺跡群第 103 次調査 III 層上面全景 (北西から)
- 図版 2 (1) 調査区東壁面土層① (南西から) (2) 調査区東壁面土層② (南西から)
(3) 調査区西壁面土層① (北東から) (4) 調査区西壁面土層② (北東から)
- 図版 3 (1) III 層上面ピット状遺構 (北東から) (2) S D18 潟 (南西から)
- 図版 4 (1) S E06 井戸 (北東から) (2) S E06 井戸土層 (北東から)
(3) S E15 井戸 (北東から) (4) S E15 井戸土層 (北東から)
- 図版 5 S D01・02・04・06・S K11 出土遺物
- 図版 6 S D07 出土遺物・S D08 出土土器
- 図版 7 S D08 出土陶磁器 (1)
- 図版 8 S D08 出土陶磁器 (2)・S D10 出土遺物
- 図版 9 包含層出土遺物
- 図版 10 包含層・その他の遺構出土遺物・瓦

I はじめに

1. 調査にいたる経過

1997（平成9）年6月23日、柳田神社宮司阿部憲之介氏から本市に対して博多区冷泉町2番における共同住宅併用駐車場新築に伴う埋蔵文化財事前審査願書が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの博多遺跡群の南西部に位置し、申請地の北西側近接地には第80次調査地（博多ふるさと館建設に伴う）が位置している。福岡市教育委員会埋蔵文化財課が、これを受け試掘調査を実施した。現況は駐車場で、アスファルト舗装されていた。調査の結果、約2mの客土下で遺物包含層、遺構が確認された。申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議をもったが、申請面積1,314.8m²のうち建物が地下の遺物包含層、遺構に及ぶ320m²を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。発掘調査および資料整理に関する協議書を交わし、調査は同年12月8日から2月28日まで行われた。

2. 調査体制

調査委託 柳田神社

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝（当時） 山崎純男（現任）

調査第2係長 山口謙治（前任） 力武卓治（現任）

庶務担当 文化財整備課 谷口真由美

調査担当 試掘調査 埋蔵文化財課上任文化財主事 松村道博（前任） 文化財主事 川山洋

発掘調査 佐藤一郎

発掘調査・資料整理協力者 尾崎真佐子・尾花憲吾・河津信子・楠本純次・占闇真理子・古賀美恵子

新郷英弘・為房紋子・中村米重・播磨博了・福井裕・福田友子・馬日真吏・山口慶子

吉住シズエ・古田恵美・萬スミヨ・相川和子・田中ヤス子・藤野邦子

その他、発掘調査に至るまでの諸々の条件整備、調査中の調整等について施工の柳田神社、施工の株式会社竹中工務店をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事終了することができました。ここに深く感謝します。

II 遺跡の位置と環境

第103次発掘調査地は博多湾に向かって北流する那珂川河口右岸に位置する博多遺跡群の南西部、柳田神社境内に位置する。柳田神社の創建については平安時代末に平清盛が所領肥前神崎所在の柳田神社を勧請した説が有力である。鎌倉幕府が九州統轄のために設置した鎮西探題館は『博多日記』によると柳田神社に近い位置にあったとされる。鎌倉時代の同社に関する史料としては、『東海一滝集』に収められている鐘銘（鐘自体は現存していない。）に1317（文保元）年から1321（元亨元）年6月にかけての鎮西探題北条時宗による同社再興の記事がある。室町時代には博多祇園山笠の主祭神として素戔鳴命（祇園大神）を京都八坂より勧請し、博多の総鎮守となったとされる。現在の社殿はいずれも近代以降に建てられたもので、以前は本殿は那珂川に面し、後に向きを変え北東に面するよう



第1図 博多遺跡群発掘調査地域図

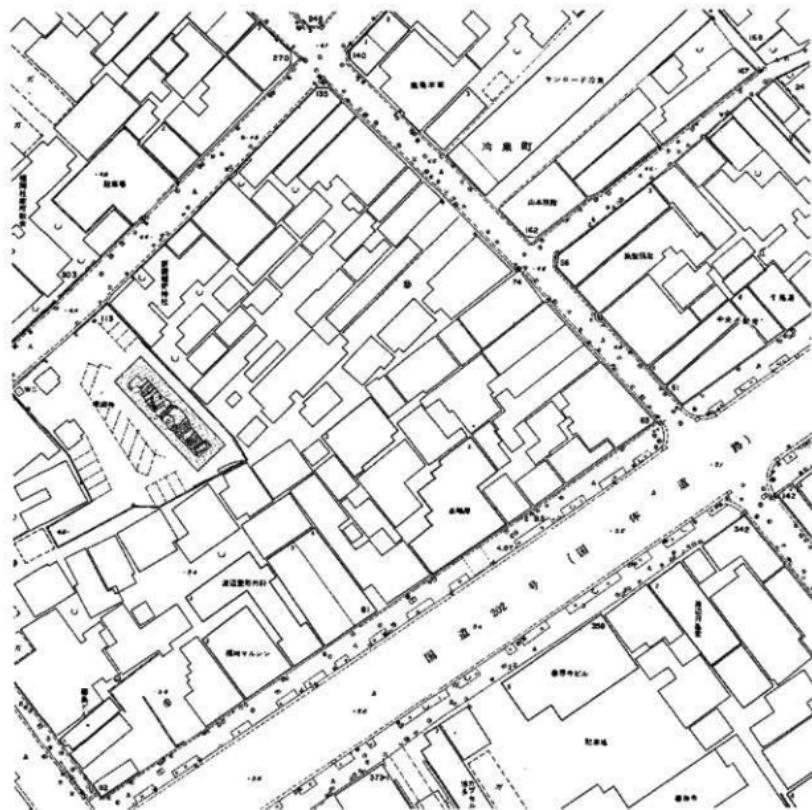
なったといわれる。境内の主軸方位はN-65°-Eを取り、周辺の町割りの方位N-50°-Eより15°東に振れている。本調査地の北西約20mの地点には第80次調査地、北東約20mの地点には第54次調査地が位置している。第54次調査は狹小な面積での立会調査で、地表下1.3~1.5mで白磁碗が多量に出土し、根切り終了後東西壁面の土層観察で幅約3mのU字溝の断面が確認されている。溝が東西に延びる可能性が指摘されているが、狭隘な面積の調査で溝の方位は不明である。また南西隅では板碑が11基出土し、内小型の連碑の表面には地蔵菩薩の種子と寶善・妙金の法名、側面には文明八(1476)年の紀年銘が刻まれている。

〈参考文献〉

川添昭二編「よみがえる中世Ⅰ 東アジアの国際都市」1988 平凡社

川添昭二「中世九州の政治と文化」1981 文獻出版

「福岡市埋蔵文化財年報 Vol.4 1989年度」1991 福岡市教育委員会



第2図 博多遺跡群第103次調査地域周辺図

III 発掘調査の概要

調査の対象は駐車場のうち平置部分を除いた南東部のタワーパーキング部分320m²を対象に、アスファルト舗装部分にカッターを入れ、遺構確認面までバックホーで壁面に勾配を付けて掘削し、堆土は一部を残して閉鎖された駐車場の平置部分に仮置きし、遺構確認の後作業員を投入し土層部分の清掃、遺構の検出にあたった。アスファルト直下には2.2~2.4mの客土が盛られ、最初に遺構が確認された面では壁面に勾配を付けて掘削した結果、72m²の調査面積に止まる。最初の遺構検出面は灰褐色砂質土（II層）上面で、標高は約2.4mを測る（以下第3図参照）。続いて灰色砂（III層）上面（標高約1.9m）、地山（黄白色粗砂）上面（標高約1.6m）で遺構の検出を行った。II層上面で検出した遺構は15世紀後半~16世紀前半の溝2条（VI期）、14世紀後半~15世紀前半（V期）の溝2条、13世紀後半~14世紀前半（IV期）の溝1条、井戸1基、12世紀後半~13世紀前半（III期）の溝1条、井戸1基、柱穴・ピット状遺構3である。IV期の溝は現在周囲の町割りと異なった主軸方位をとる樹田神社と同じ方位である。III層上面ではV期の溝2条、11世紀後半~12世紀前半（II期）の溝3条、柱穴・ピット状遺構10を検出した。地山上面では8世紀前半（I期）の溝1条を検出した。V期の溝出土遺物のほとんどは瓦で、三つ巴文の軒丸、唐草文の軒平がみられる。出土遺物の量的なピークはIII期で土器、輸入陶磁器がそのほとんどを占める。溝SD08からは木造仏手が出土している。指は欠失しているが、甲の一部には金泥が残っている。

IV 遺構と遺物

1. 検出遺構（第4・5図、図版1~4）

溝

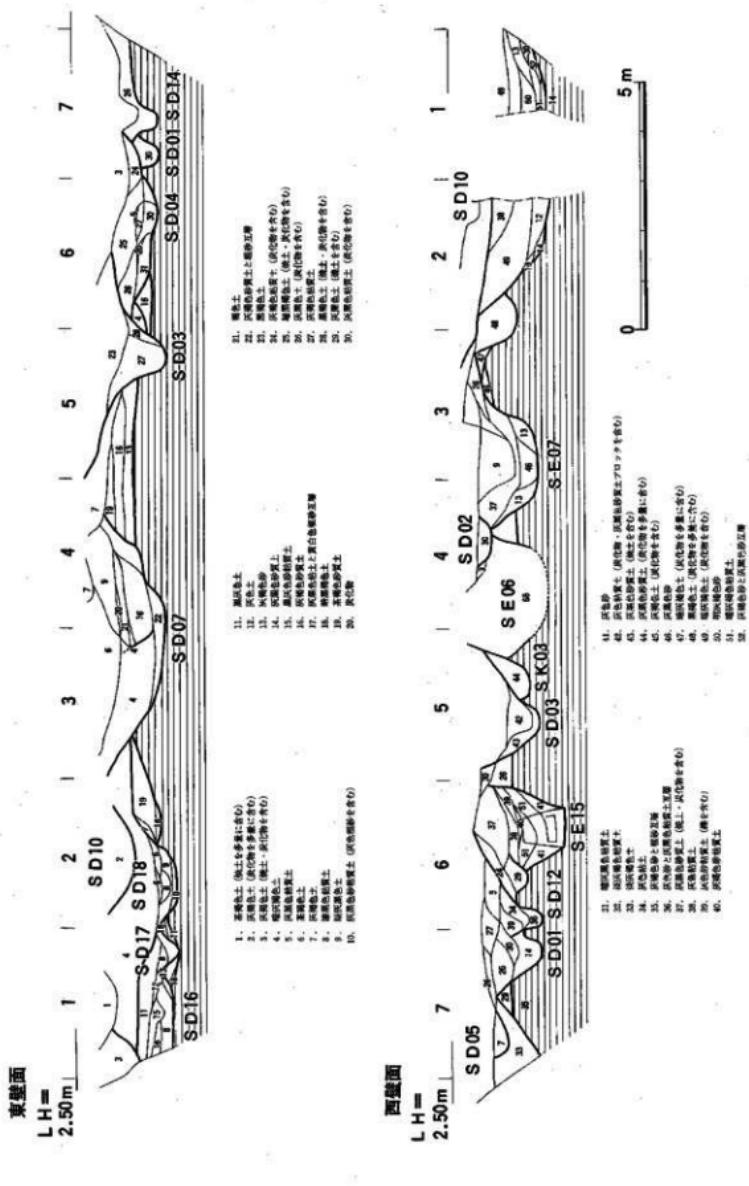
SD01 調査区南側、A・B-7の灰褐色砂質土（II層）上面で検出した。N-65°-Eに方位をとる断面半円形の溝である。幅0.9~1.1m、深さ0.6mを測る。壁面は約50~60°の傾斜で、床面幅20cmを測る。延長3.1m検出した。遺構廃絶の時期は15世紀後半~16世紀前半と見られる。

SD02 調査区のはば中央、A・B-4、灰色砂（III層）およびSD07の南側上面で検出した。方位はN-50°-Eにとる。断面逆台形の溝である。幅0.8~0.9m、深さ15~25cmを測る。壁の傾斜角度は約40~50°を測る。床面幅0.2~0.3mを測る。延長4.2m検出した。遺構廃絶の時期は11世紀後半~12世紀前半と見られる。

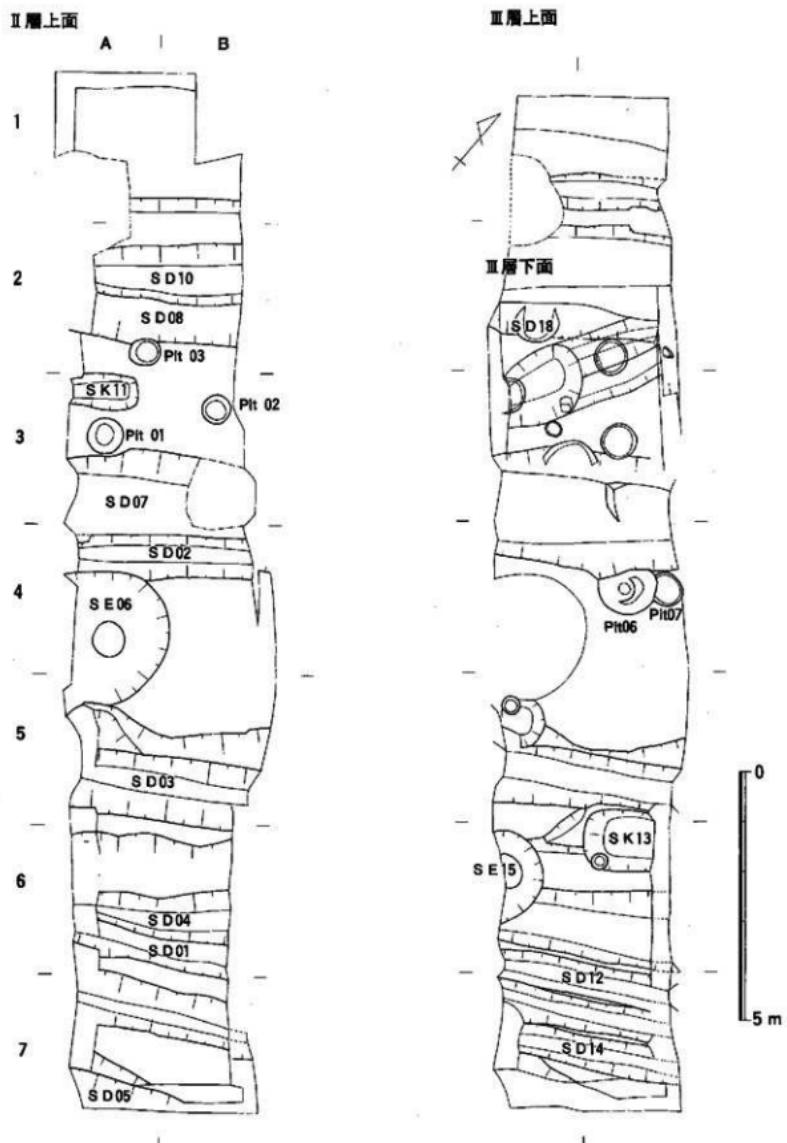
SD04 調査区の中央よりやや南側、A・B-6で検出した。検出部分の中央で屈曲しており、方位は不明である。断面半円形の溝である。幅0.6~1.1m、深さ10cmを測る。壁の傾斜角度は約40~50°を測る。床面幅0.2~0.4mを測る。延長3.1m検出した。遺構廃絶の時期は11世紀後半~12世紀前半と見られるが、一部12世紀後半まで下る遺物が混入している。

SD07 調査区のはば中央、A・B-3・4、灰色砂（III層）上面、SD02の下面で検出した。SD02とはほぼ同じ方位（N-50°-E）にとる。断面逆台形の溝である。幅2.2~2.6m、深さ0.5~0.6mを測る。壁の傾斜角度は約30°を測る。床面幅1.0~1.4mを測る。延長4.2m検出した。遺構廃絶の時期は11世紀後半~12世紀前半と見られる。

SD08 調査区北側、A・B-1・2、SD01の下面で検出した。SD10とはほぼ同じ方位（N-50°-E）にとる。断面逆台形の溝である。幅2.8~3.0m、深さ0.7mを測る。壁面の傾斜角度は約30°を測る。



第3図 博多港防波堤103次調査壁面土層図



第4図 博多遺跡群第103次調査柵構配置図

床面幅0.8~1.0mを測る。延長3.4m検出した。遺構廃絶の時期は12世紀後半~13世紀前半と見られる。

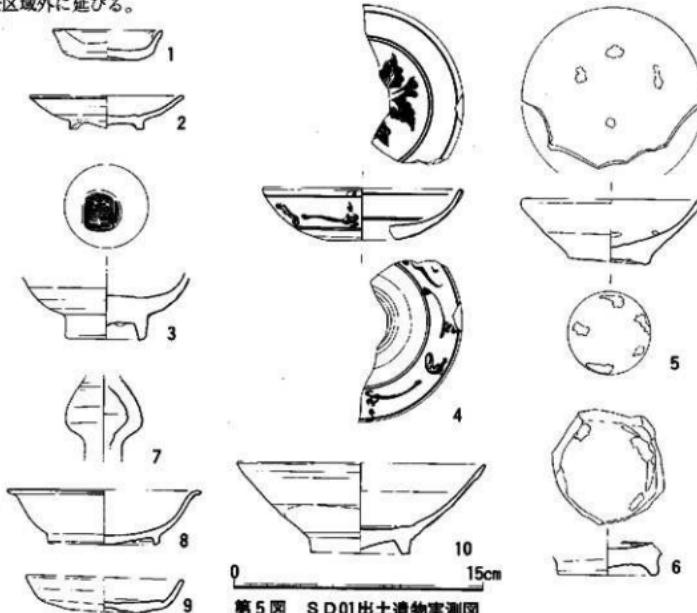
S D10 調査区北側、A・B-2、S D08の上面で検出した。N-50°-Eに方位をとる断面半円形の溝である。幅1.0~1.2m、深さ0.1mを測る。土層を確認したところ遺構を確認した面より約0.4m上位で掘り込みが確認された。最大幅で2.1m、深さは0.5mを測る。壁面は約30°の傾斜で、床面幅0.4~0.6mを測る。延長3.0m検出した。遺構廃絶の時期は13世紀後半~14世紀前半と見られる。

S D18 調査区北側、A・B-2・3、地山（黄白色粗砂）上面で検出した。N-50°-Eに方位をとる断面半円形の溝である。幅1.4m、深さ0.1mを測る。壁面は約20°の傾斜で、床面幅25~35cmを測る。延長3.3m検出した。遺構廃絶の時期は8世紀前半と見られる。十層観察、遺構出土の遺物からみた溝の変遷をたどると、S D18（8世紀前半）→S D16→S D07（11世紀後半~12世紀前半）→S D02・04→S D08（12世紀後半~13世紀前半）→S D10（13世紀後半~14世紀前半）→S D05・14→S D01・12（15世紀後半~16世紀前半）となり、S D10までは方位をN-50°-Eにとるが、以降は現況の柳田神社の社殿と同じN-65°-Eに方位をとるようになる。

井戸

S E06 調査区中央、A-4、II層上面で検出した。掘り方は上面径2.7mの円形を呈し、深さは2.4m、底面の標高0.3mを測る。基底部の中央に径80cm、深さ20cmの桶側の痕跡とみられる木質が残存していた。井戸の南西は調査区西壁面にかかり、調査区外に延びる。

S E15 調査区南側、A-6、II層下面で検出した。掘り方は上面径1.9mの円形を呈し、深さは1.9m、底面の標高0.3mを測る。基底部の中央に上端径60cm、下端径80cm、深さ20cmの桶側、その内側には径80cm、深さ20cmの曲物の痕跡とみられる木質が残存していた。井戸の南西は調査区西壁面にかかり、調査区外に延びる。



第5図 S D01出土遺物実測図

2. 出土遺物

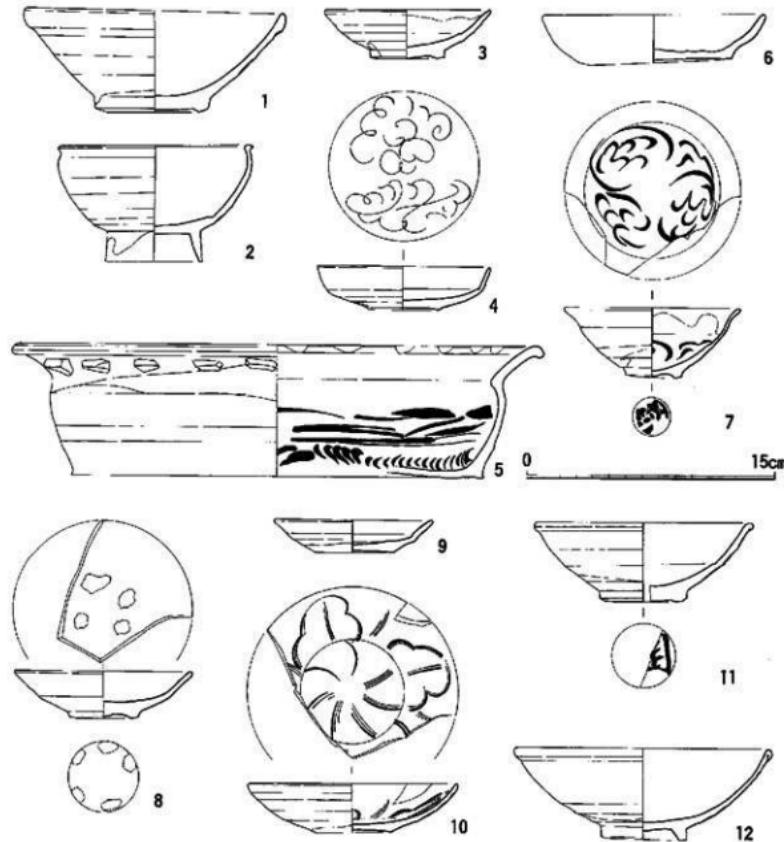
S D01出土遺物 (第5図、図版5)

土師器 小皿 (1) 底部は回転糸切難しにより、内底まで回転横ナデされる。口径6.5cm、器高1.8cm、底径3.6cmを測り、器高はやや高く、口径に比べ底径は小さい。口縁部に煤が付着しており、灯火器として使用されたのであろう。

白磁 皿 (2) 高台の1カ所に弧状の抉り込みがあり、全面に施釉される。復元口径9.2cm、器高2.1cm、復元高台径4.4cmを測る。

青磁 碗 (3) 内底見込みに「頼氏」銘を持つ底部片で、全面に施釉の後、外底の釉を輪状に削り取っている。

青花 皿 (4) 基衝底の皿C群で、口縁部、腰部に界線をめぐらせ、体部および内底見込みの一



第6図 SD02・04, SE06, SK11出土遺物実測図

重の界線の中に文様を配す。復元口径12.0cm、器高3.2cm、復元高台径4.0cmを測るやや大型のものである。

雜釉陶器 朝鮮王朝陶磁器である。

皿（5） 体部が直線的に開く高台付皿で、高台の内側は僅かである。浅明橙色の胎上に灰白色の不透明の釉が全面に掛けられ、外底部はかいらぎを呈する。高台、内底見込みに5ヶ所目痕が残る。口径11.0cm、器高3.7cm、高台径4.9cmを測る。

碗（6） 底部片で、内底見込みには日痕が残り、外底の中央には不定方向の削りが入る。直径1mm前後の白色砂粒、黒色微粒子を多量に含む灰黄色の胎上に無色透明の釉が掛けられ、器表には細かい貫入が入っている。

陶器 華瓶（7） 濱戸産の鉄釉の尊形華瓶で、口縁部と底部は欠失している。頭部には凹線が2条入る。灰色の胎上に暗褐色—褐色の釉が施される。

白磁 皿（8） 青花皿B群と同じ器形、端反り口縁の高台付皿である。復元口径11.6cm、器高3.3cm、高台径6.7cmを測る。

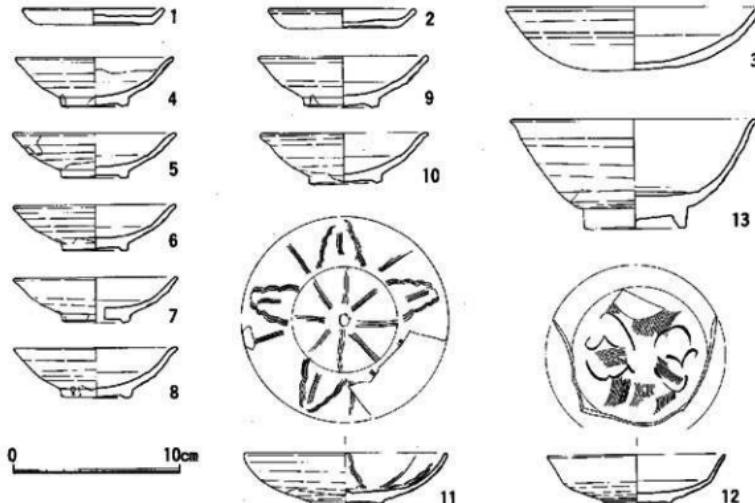
白磁 皿（9） 皿類、碗（10） 皿—2類 下層に伴う遺物であるが、溝造営の際に混入したものである。

S D02出土遺物（第6図、図版5）

白磁

碗（1・2） 1は内底見込みに沈線状の段がないIV類で、断面玉縁状を呈する口縁下は強くなられ、稜をなす。体部外面下半まで施釉される。2は口縁部下ごくわずかにくぼめた束口の碗で、高台は細く高く、内底見込みに沈線状の段を有する。高台付近まで施釉される。

皿（3・4） 3は削りの浅い高台付きの皿で、高台の外側まで施釉される。4は広く平らな内底から口縁部が外反気味に付き、外底部にはわずかに高台を削り出している。内面の屈曲する底部との



第7図 S D02出土遺物実測図

境には沈線状の段が付き、その内側の見込みには花卉文が線彫りされる。

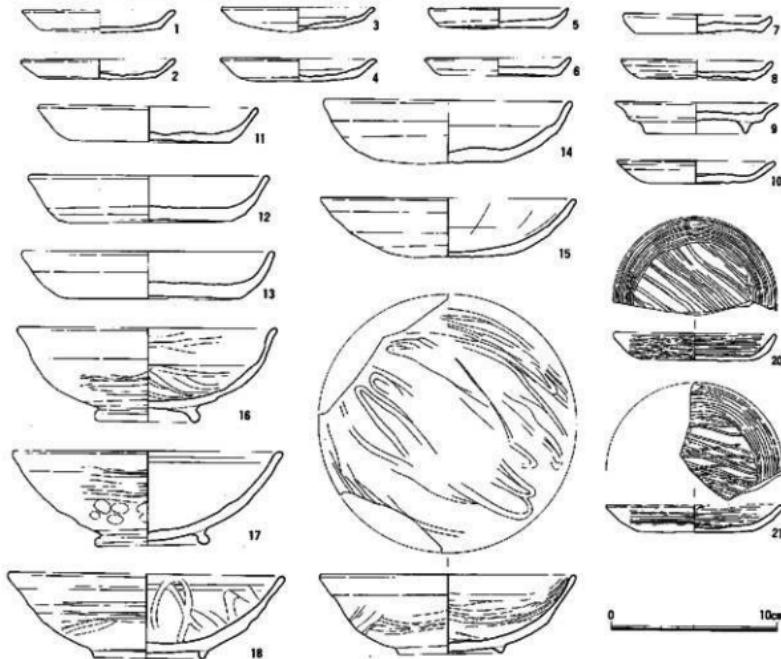
陶器 盤（5） 韶江磁窯の黄釉鉄絵盤で、鶴形の口縁が付く。底部は欠失し体部の羽状文などが残るのみであるが、内底見込みには花卉文が描かれていたとみられる。胎土には砂粒を多量に含み、灰白色を呈する。灰オリーブ色の釉下には化粧土が掛けられ、口縁端部付近には目痕が残る。

S D04出土遺物（第6図、図版5）

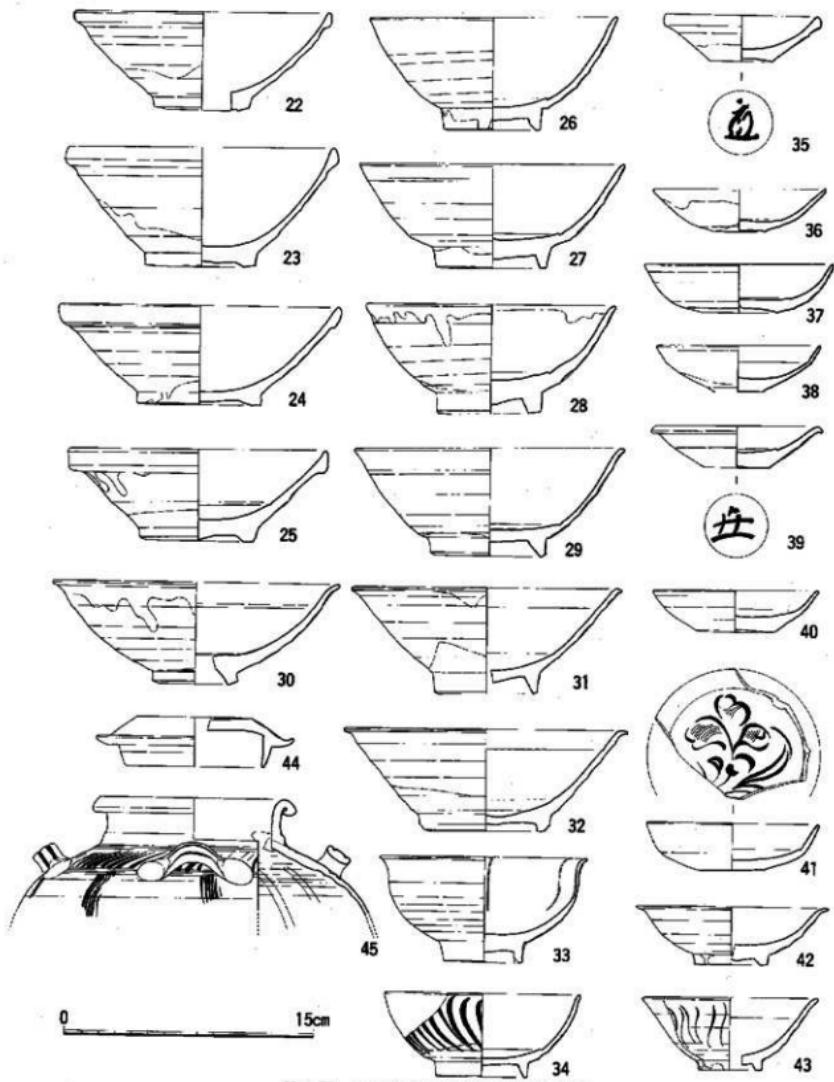
土師器 杯（6） 底部は回転糸切離しにより、内底まで回転横ナデされる。口径13.5cm、器高2.9cm、底径8.6cmを測る。

青磁 小碗（7） 体部は内湾気味にのび、口縁下から外反する。高台は断面逆台形を呈し、端部は外側に跳ねる。体部内面の上位に沈線をめぐらせ、その内側には宝相華唐草文を簡略化した片切彫りの文様が施される。灰白色の胎土に灰オリーブ色の釉が体部外面下半まで施される。口径10.6cm、器高4.2cm、高台径3.4cmを測る。外底に墨書が記されているが判読不能。福建省連江县魁岐窯で類例が報告されている。浙江省南部臨窯系の内面に型押しの宝相華唐草文を施す小碗と同様に、器形、法量、文様構成において陝西省耀州窯青磁小碗を粗雑ではあるが模倣したものと考えられる。

雜釉陶器 皿（8） 上層の遺構に伴うものの混入である。朝鮮王朝陶磁器である。体部中位で屈曲し、口縁部が直線的に外上方へのびる高台付皿である。直径1mm前後の白色砂粒、黒色微粒子を多量に含む灰色の胎土に灰色の釉が全面に施釉される。高台、内底見込みに4～5ヶ所目痕が残る。復元口径11.0cm、器高2.7cm、高台径5.0cmを測る。



第8図 S D08出土土器実測図



第9図 SD 08出土陶磁器実測図(1)

S E 06出土遺物(第6図、図版5)

青磁皿(9) 体部は中位で屈曲し、口縁部は外反気味にのびる。内面の屈曲する底部との境には沈線状の段が付く。底部は上げ底状を呈する。灰色の胎土に灰オリーブ色の釉が体部外面下半まで

施されるが、内底見込みは薙胎となっている。外底に墨痕がみられるが、不明瞭で判読できない。

白磁 盆 (10) 体部は口縁部まで内湾気味にのび、底部は上げ底状を呈する。内底見込みには沈置線をめぐらせ、内面全体に双線花弁文（あるいは蕉葉文）が片切彫りされる。胎土は灰白色、釉は灰白色透明を呈し、細かい貫入が入る。釉下には化粧土が掛けられている。

S K11出土遺物 (第6図、図版5)

白磁 碗 (11・12) 11は口縁を折り返し小さい玉縁状をしている。幅広の高台の内削りは浅く、底部の器肉は厚い。内面の体部中位に沈線状の段が付く。黒色微粒子を含む灰白色の胎土に灰白色透明の釉が体部外向下半まで施釉される。復元口径13.2cm、器高4.7cm、復元高台径5.7cmを測るやや小振りの碗である。外底に墨書が配されているが判読不能。12は内湾気味の体部に小さい玉縁状口縁が付く。高さ7mm前後の高台の外面を直に、内面は斜めに削り出されている。内底見込みに段がないII-1類である。黒色微粒子を含む灰白色の胎土に灰白色透明の釉が体部外向下半まで施され、貫入がみられる。釉下には化粧土が掛けられている。

S D07出土遺物 (第7図、図版6)

土師器

小皿 (1・2) 底部は回転糸切離しにより、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径8.5・8.8cm、器高1.0・1.2cm、底径6.8cmを測る。

丸底杯 (3) 体部中位の屈曲部が肥厚し、内面には段が付く。内面をコテ状の工具を用いて平滑にし、体部外面は回転横ナデ、外底部にはヘラ切り離し痕、板状圧痕がみられる。口径15.5cm、器高3.8cmを測る。

白磁

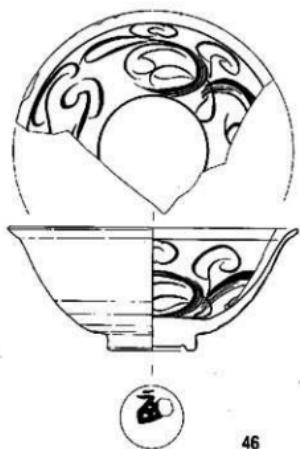
皿 (4~12) 4~10まで同一規格の高台付皿が7個体分出土している。体部中位のやや下で屈曲し、口縁部は外反気味にのびる。内面の屈曲する部位には沈線状の段が付く。高台の削りは浅い。黒色微粒子を含む灰白色の胎土に灰白色の釉が高台の外側まで施されている。釉の透明、不透明、ピンホールの有無など、個々の焼成にはばらつきがみられる。11・12は削りの浅い高台付きの皿で、体部下半まで施釉される。黒色微粒子を含む胎土は灰白色、釉は無色透明を呈し、部分的に細かい貫入が入る。釉下には化粧土が掛けられている。12は体部から口縁部まで内湾し、底部の中心には突起が付き、内底見込みには沈置線をめぐらせ、内面全体に双線花弁文（あるいは蕉葉文）が片切彫りされる。V-1・b類。12は広く平らな内底から外反気味の口縁部がのび、屈曲する底部との境の内面には沈線状の段が付き、内底見込みにはヘラ、構状の工具を用いて花卉文が施される。

碗 (13) 体部は内湾気味の下位から直線的にのびやや外反する口縁部が付くV-1類である。内底見込みに沈線をめぐらせる。体部下半まで施釉される。

S D08出土遺物 (第8~10図、図版6~8)

土師器

小皿 (1~10) 1~4の底部は回転ヘラ切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径9.1~9.4cm、器高1.2~1.4cm、底径7.1~7.3cmを測る。5~9の底部は回転糸切離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径8.4~9.2cm、器高1.1~1.2cm、底径6.9~7.6cmを測る。9は高台付きの小皿で、底部は回転糸切離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。高台は貼り付けによる。口径9.8cm、器高1.9cm、高台径6.0cmを測る。10は豊前型の小皿で、底部は回転糸切離し、内底まで回転横ナデされる。口径9.6cm、器高1.4cm、底径4.1cmを測る。



47



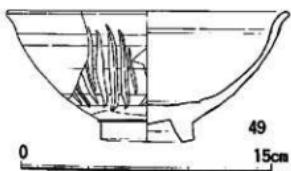
48



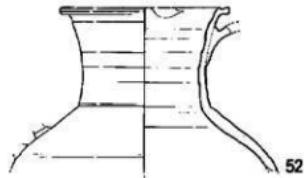
50



51



0 15cm



52

第10図 SD08出土陶磁器実測図(2)

杯 (11~13) 底部は回転糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径13.2~15.1cm、器高2.1~2.8cm、底径9.9~10.5cmを測る。

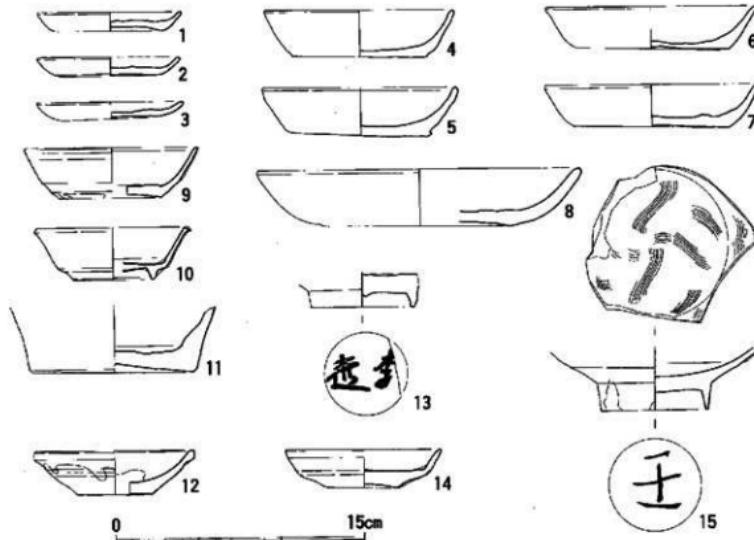
丸底杯 (14~15) 体部中位の屈曲部より上はやや薄く引き出される。内面をコテ状の工具を用いて平滑にし、15は口縁下にコテ当て痕が放射状にみられる。いずれも体部外面は回転横ナデ、外底部にはヘラ切り離し痕、板状圧痕がみられる。口径15.0~15.3cm、器高3.5~3.8cmを測る。

黒色土器A 梶 (16) 内湾気味の体部中位のやや上で屈曲し、外反する口縁部が付く。撥状の貼り付け高台が付く。外面は口縁部と体部下位から高台にかけて横ナデ、体部中位から下位にかけては横方向にヘラ磨きされ、外底部には板状圧痕が残る。内面は横方向にヘラ磨きし、炭素を吸着させ黒色を呈する。胎土には粗い砂粒を含み、浅黄橙色を呈する。口径15.5cm、器高5.7cm、高台径6.3cmを測る。

土師器 梶 (17) 内湾気味の体部中位で屈曲し、屈曲部は肥厚し、口縁下外面でナデられやや外反する口縁部が付く。やや薄く引き出されている。底部には撥状の高台が貼り付けられる。外面は口縁下の他、体部下位から高台にかけて横ナデ、体部中位は横方向にヘラ磨きされ、中位のやや下には指頭圧痕が残る。内面は磨滅が著しいが、横方向のヘラ磨きとみられ、口縁下には凹線をめぐらせる。胎土には粗い砂粒を多量に含み、淡黄色を呈する。口径16.1cm、器高5.7cm、高台径6.5cmを測る。

瓦器

楕 (18~19) 体部は丸みをもち、中位の屈曲部より上はやや薄く引き出され、口縁部は直線的に外上方へのびる。体部外面は横方向、内面は一方向にヘラ磨きされる。断面半円形の貼り付け高台とその周囲は横ナデされ、ヘラ切離し、板状圧痕が残る。18は胎土に細かい砂粒を小量含み、口縁部外面が灰色、その他の部位は灰白色を呈する。復元16.6cm、器高5.0cm、高台径6.7cmを測る。19は精良な胎土で、明青灰色~暗青灰色を呈する。15.4cm、器高5.8cm、高台径6.0cmを測る。



第11図 SD10出土遺物実測図

小皿（20・21） 楠葉型瓦器小皿である。体部は横方向にヘラ磨きされる。内底見込みは20が一方に向く、21は鋸齒状の暗文風にヘラ磨きされる。ヘラ磨きの幅は2mm以下と細い。外底は未調整である。胎土はいずれも精良で、20が暗紫灰色～紫黒色、21は青灰色～暗青灰色を呈する。法量は20が口径9.9cm、器高1.6cm、底径7.0cm、21は復元口径10.8cm、器高1.6cm、復元底径7.0cmを測る。

白磁

碗（22～34） 黒色微粒子を含む灰白色の胎土に灰白色の釉が施されている。玉縁状口縁の22～25は内側りの浅い幅広の高台を有し、底部の器肉が厚くなるIV類である。22～24の内底見込みには沈線状の段はみられない。25のIV-1・A類に比べ、体部は丸みをもち、やや深めである。22・23は口縁部が断面三角形の玉縁状を呈し、口縁下外面は強くなられ、稜をなす。体部外面下半まで施釉される。24の玉縁状口縁は折り返し部分が垂下し、高台の外側まで施釉される。25は断面三角形の玉縁状を呈し、内底見込みに沈線状の段がつく。体部外面下半まで施釉される。26～28は体部は内湾気味のト位から直線的にのび、やや外反する口縁部が付く。V-1類である。内底見込みに沈線状の段がつく。高台は高さ1cm前後で、外面を直、内面を斜めに削り出しが、28は高台が太く、底部の器肉は厚い。29も同一の器形をとり、内底見込みには沈線をめぐるが、釉を輪状に削り取っている。26～29は体部と高台の境付近まで施釉されている。30は内湾気味の体部の上位で屈曲し、やや薄く引き出された口縁部を外反させる。口縁下内面には沈線をめぐらせ、内底見込みには沈線状の段がつく。高台は太く、外面を直、内面を斜めに削り出す。高台付近まで施釉され、内底見込みの釉を輪状に削り取っている。31・32は直線的にのびる体部から口縁部を外反させ端部を水平におさめる。体部外面下半まで施釉される。31は口縁下内面、内底見込みに沈線をめぐらせ、高台が細く高いV-4類である。32の高台は高さ、幅が1cm前後とやや太く、邊部の外側は面取りされている。内底見込みの釉を輪状に削り取っている。33は内湾気味の体部の中位で屈曲、上位は直立し、外反する口縁部が付く。器周の残存1/4の口縁部から七輪花に復元され、輪花毎に体部内面を堆線で区割りする。高台は幅5mmと細く、内側りは浅く底部の器肉は厚くなっている。高台まで施釉される。34は内湾気味の体部のやや上位で屈曲し、外反する口縁部が付く。内底見込みには沈線状の段がつく。高台は細く低く、外面を直、内面を斜めに削り出している。体部外面下半まで施釉される。体部外面にはヘラ状の工具を用いて条線（斜線文）を片切彫りされる。外底に墨痕がみられるが、不明瞭で判読できない。

皿（35～42） 35は体部が直線的にのび、口縁部を肥厚させ口縁下外面は強くなられ、稜をなし、玉縁状を呈する。底部は上げ底状を呈する。黒色微粒子を含む灰白色的胎土に灰オリーブ色の釉が体部外面下半まで施される。外底に墨書が記されているが判読不能。36は広く平らな底部から口縁部がほぼ直線的に付き、内底見込みには沈線状の段がつくV類である。体部外面下半から上げ底状を呈する外底部にかけては露胎である。37は平らな底部がさらに広く、内湾気味の体部下半から口縁部が直線的にのびる。底部は上げ底状を呈し、体部外面下半まで施釉される。38はやや内湾気味の体部の上位で屈曲し、薄く引き出された口縁部が直線的にのびる。屈曲部の内面には沈線状の段がつく。黒色微粒子を含む灰白色的胎土に明オリーブ灰色の釉が体部外面下半まで施され、釉下には化粧土が掛けられている。VI-1・a類。39は直線的にのびる体部から口縁部を外反させ端部を斜めに切る。内底見込みには沈線状の段がつく。全面施釉の後釉が削り取られ露胎となっている平底の外底には、墨書が記されているが判読不能。40は直線的にのびる体部の中位で鈍く屈曲し、薄く引き出された口縁部が直線的にのびる。外底部はやや上げ底状を呈し、全面施釉の後釉を削り取っている。41は体部中位で屈曲し、口縁部がほぼ直線的にのびる。屈曲部の内面には沈線状の段がつく。内底見込みにはヘラ、構状の工具を用いて花卉文が施される。42は内湾気味の体部のやや上位で屈曲し、やや薄く引き出さ

れた口縁部を外反させる中型の高台付皿である。

小碗（43） 体部は内湾気味の下位から直線的にのび、外反する口縁部が付く。口縁下内面に沈線をめぐらせる。体部外面にはヘラ状の工具を用いて条線を施す。高台の外側まで施釉される。V-2・b類。

蓋（44） 天井部を平坦にし、身受けの返りはやや上方に反っている。黒色微粒子を含む白色の胎土に灰白色透明の釉が施される。器周の残存1/4からの復元であるが、四耳壺に用いられた蓋か。

四耳壺（45） 体部下半は欠失している。口縁部は丸く折り曲げ玉縁状にする。頸部の接合痕は明瞭で、内面の体部との境は鋭く稜をなす。なだらかな肩部に凹線を2条めぐらせ、横向方向の把手を4ヵ所貼り付ける。把手にもそれぞれ凹線が2条入る。頸部と肩部の凹線の間には放射状にヘラ状の工具を用いて条線が片切彫りされる。体部の凹線より下は縱方向の5条単位の条線が片切彫りされる。体部外面下半が回転ヘラ削りされ、その他の部位は回転横ナデされる。黒色微粒子を含む白色の胎土に灰白色透明の釉が体部外面下半まで施され、部分的に釉が垂下し、貫入がみられる。

青磁

碗（46~49） 46・47はヘラ状の工具を用いて蓮華折枝文を片切彫りする龍泉窯系青磁碗I-2類（荷葉が入る47はI-2・b類）、48は同安窯系青磁碗I-1・b類、49は内湾気味の体部のやや上位で屈曲し、口縁部を外反させる。口縁下内面には沈線をめぐらせ、内底見込みには沈線状の段がつく。高台は太く、逆台形状を呈する。明オリーブ灰色~灰白色の胎土に灰オリーブ色の透明の釉が高台付近まで施される。体部外面にヘラ状の工具を用いて条線を施す。同安窯系青磁碗III-1・a類。

皿（50） ヘラ状の工具を用いて蓮華折枝文を片切彫りする龍泉窯系青磁碗I-1・a類。

黒釉陶器 碗（51） 東口の天目茶碗である。口縁下で屈曲し、口縁直下の内面はわずかにくぼみ稜をなす。内底部は平坦で、高台の内刺りは浅く粗い。黒色微粒子を含む明褐色の胎土に黒褐色の釉が体部外面下半まで掛けられている。口径12.4cm、器高6.0cm、高台径3.6cmを測る。

陶器 水注（52） 注口・把手・体部下半が欠失している。外以氣味に直立する頸部から口縁部を屈曲させ平坦な面をなしている。肩部には凹線がめぐる。白色砂粒、黒色微粒子を含む灰色の胎土にオリーブ黄色の釉が施されている。口縁端部付近には目痕が残る。

S D10出土遺物（第11図、図版9）

土師器

小皿（1~3） 底部は回転糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状压痕がみられる。口径8.6~8.8cm、器高1.1~1.2cm、底径5.8~6.5cmを測る。

杯（4~7） 底部は回転糸切り離し、5の体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状压痕がみられる。4・6・7は内底まで回転横ナデされる。口径11.4~12.8cm、器高2.5~2.9cm、底径8.0~9.3cmを測る。

大杯（8） 底部は回転糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状压痕がみられる。器周の残存1/3からの復元口径19.4cm、器高3.6cm、復元底径11.8cmを測る。

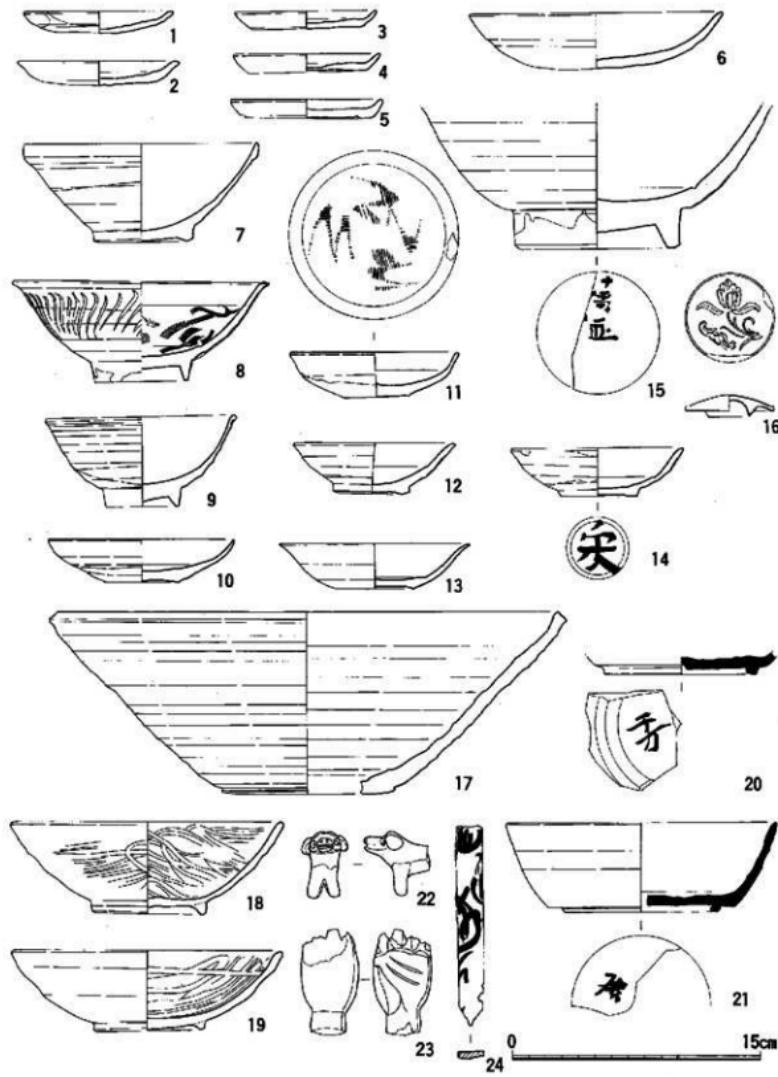
白磁 皿（9） 口縁端部を口禿にし、全面施釉されるIX-1・b類。

青磁 杯（10） 龍泉窯系青磁杯III-1・a類。

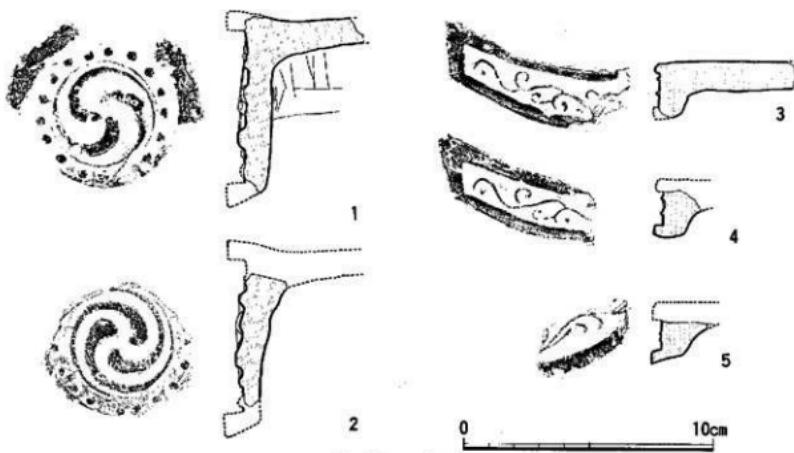
青白磁（11） 壺もしくは瓶の底部片である。黒色微粒子を含む灰白色の胎土に無色透明の釉が施されている。貫入が著しい。外底部は露胎である。

以下、下層に伴う遺物であるが、溝造営の際に混入したものである。

白磁 皿（12） 体部は直線的にのびる。口縁部端部は直に削られ、口縁下外面は強くなられ、



第12図 包含層、その他の遺構出土遺物実測図



第13図 瓦実測図

口縁部は玉縁状を呈する。碗（13・14） 13は碗Ⅲ-2類の底部片で、外底に「李□」の墨書が記されている。14はV-4・b類の底部片で、外底に「王」の墨書が記されている。

青磁 皿（15） 龍泉窯系青磁皿I-2・a類。

包含層・その他の遺構出土遺物（第12図、図版9・10）

土師器 いずれもⅡ層、1がA-3、2-6がB-1からの出土である。

小皿（1～5） 1・2の底部は回転糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径8.9～9.7cm、器高1.3～1.5cm、底径7.0～7.2cmを測る。3～5底部は回転糸切り離し、内底まで回転横ナデされる。口径8.5～9.2cm、器高1.1～1.2cm、底径6.8～8.2cmを測る。

丸底杯（6） 内面をコテ状の工具を用いて平滑にし、体部外面は回転横ナデ、外底部にはヘラ切り離し痕、板状圧痕がみられる。口径15.3cm、器高3.4cmを測る。

白磁 いずれもⅡ層からの出土である。

碗（7・8） 7は玉縁状口縁、内割りの浅い幅広の高台をもち、内底見込みには沈線状の段はみられない。口縁下外面は強くなでられ、稜をなす。体部外面中位まで施釉される。B-1出土。8は内湾気味の体部から口縁部を外反させ端部を水平におさめる。口縁下内面、内底見込みに沈線をめぐらせ、高台が細く高い。体部外面にヘラ状の工具を用いて条線を施し、内面には櫛状の工具を用いて獣摺の文様を施す。高台の外側まで施釉される。V-4・b類で、B-2出土。

小碗（9） 内湾気味の体部下位から口縁部が直線的にのび、端部は口縁部は丸く小さく折り曲げられている。内底見込みには沈線状の段はみられない。体部外面下半まで施釉される。V-1類の派生型で、B-1出土。

皿（10～14） 10は体部は口縁部まで内湾気味にのび、底部は上げ底状を呈する。内面は見込みには沈線をめぐらせ、無文である。体部外面下半まで施釉され、釉下には化粧土が掛けられている。A-3出土。11は体部中位で屈曲し、口縁部がほぼ直線的にのびる。屈曲部の内面には沈線状の段がつく。内底見込みには櫛状の工具を用いて之字形点綴文が施される。体部外面下半まで施釉される。

B-2出土。12・13は体部の中位もしくはそのやや下で屈曲し、口縁部が外反気味にのびる。屈曲部内面には沈線状の段が付く。高台の削りは浅い。体部外面下半まで施釉される。12はA-3、13はや口径が大きく、外底に「宋」の墨書が記されている。B-1出土。14は広く平らな底部に内湾気味の体部下半から外反する口縁部がのび、内底見込みには沈線状の段がつくV類である。底部は上げ底状を呈し、露胎である。釉下には化粧土が掛けられている。A-3出土。

大碗 (15) 碗V-1類の大型品で、外底に墨書が記されているが、判読不能。

青白磁 蓋 (16) 天井部に蓮華折枝文を型押しする返りをもった小壺の蓋である。胎土は灰白色で、明オーリーブ色透明の釉が外面に掛けられている。B-1Ⅱ層出土。

須恵器 片口鉢 (17) 体部は内湾気味の下位から直線的にのび、やや内湾する口縁部がつく。端部は平坦にする。体部は外面から内面上半が横ナデ、内面下半以下はナデ、色調は青灰色を呈する。

瓦器 植 (18・19) 18は体部は内湾気味の下位から直線的にのび、やや肥厚する口縁部が付く。体部は内外面とも四分割して横方向にヘラ磨きされ、断面逆台形の貼り付け高台とその周囲は横ナデされる。ヘラ磨きの幅は2~3mmと細い。胎土には細かい砂粒を少量含み精良で、全体的には暗青灰色~青黒色、一部は銀色、口縁部はぶい黄橙色を呈する。復元口径16.3cm、器高5.6cm、復元高台径6.9cmを測る。SD16出土。19は内湾気味の体部中位で屈曲し、屈曲部は肥厚し、屈曲部上位で強くナデられ、器壁が薄くなり、口縁部がやや外反し短くのびる。底部には断面逆台形の高台が貼り付けられる。内面は一方向にヘラ磨きされ、外面は口縁部が横方向にヘラ磨き、それより下は横ナデされ、体部下半には糸切離し痕、底部には板状压痕が残る。胎土には細かい砂粒を少量含み、内面から口縁部外面にかけて暗紫灰色、その他の部位は明紫灰色を呈する。口径16.3cm、器高4.8cm、高台径6.7cmを測る。Pit06出土。

須恵器 杯 (20・21) 底部と体部の境に稜がつき、断面四角形の高台が底端部よりやや内側に貼り付けられる。20は外底に「千」あるいは「干」と「万」あるいは「方」の墨書が記されている。SD07出土。21は内湾気味の体部からやや外反する口縁部がつく。外底に「慶」あるいは「廣」の墨書が記されている。B-3Ⅱ層出土。

黒釉犬 (22) 灰白色の磁胎に黒褐色の釉をかけた了犬で、腹部から脚部にかけては露胎である。下半身は欠失している。垂れた耳は貼り付けにより、目・鼻・口は前方からの刺突で表現している。Pit02出土。

木造仏手 (23) 指はすべて欠失し、甲の一部に金泥が残る。残された部位の寸法から立像であれば高さ70cm前後的小尊像となろう。SD08からの出土で、共伴遺物から平安末から鎌倉初に下限を求められる。

木簡 (24) 図中の上端部以外は欠失している。厚さ3mmの板材に文字とともに図像ともつかない墨書きが記されている。

瓦類 (第13図、図版10)

今回の調査では、軒平瓦、軒丸瓦、丸・平瓦が出上した。主として、SD01の埋土から出土した。総量は容量18ℓのコンテナ20箱。

軒丸瓦 1は瓦当径15.0cmで、内区は右巻きの三つ巴文である。頭部はやや尖り、尾は半周して他の巴に接している。外区は小さな珠文17個を配し、さらに外側には周線をめぐらせる。周線の幅は2.0cmを測る。SD01出土。2は周縁が欠失し、瓦当径は不明で、内区は左巻きの三つ巴文である。頭部は丸みをおび、尾は半周して他の巴に接している。外区は復元で小さな珠文20個を配している。A-3Ⅱ層出土。

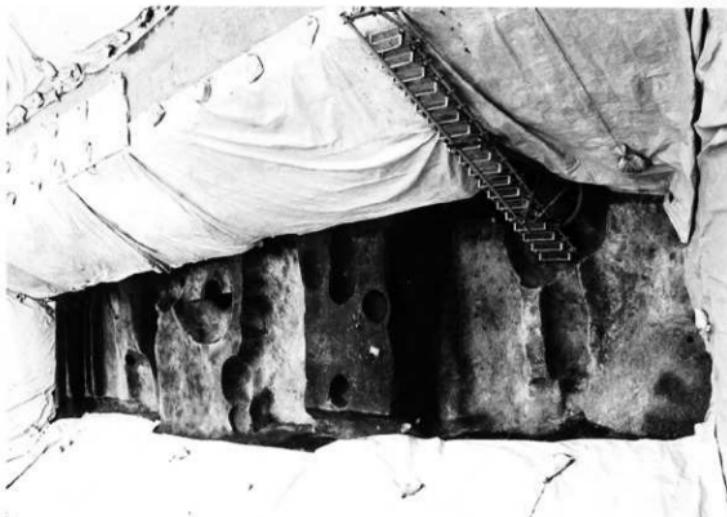
軒平瓦 同范の瓦が第80次調査SK61から出土しており、3・4は右から左に流れる扁行唐草文を配し、瓦当幅は23.5cm、瓦当厚4.5cm前後と推定される。3はA-3 II層、4はSD01からの出土。5は五つ葉の中心飾り、左右に3回反転する均整唐草を配し、瓦当幅は25.5cm、瓦当厚5.0cm前後と推定される。SD03出土。

種類 番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	種類 番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	種類 番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)
SD01											
土師器小皿				土師器杯				5.	11.8	2.9	8.5
1.	6.6	1.8	5.6	11.	13.2	2.1	9.6	6.	12.7	2.5	9.3
SD04											
土師器杯				丸底杯				7.	12.8	2.6	9.3
1.	13.5	2.9	8.6	14.	15.0	3.7		8.	19.4	3.6	11.8
SD07											
土師器小皿				黑色土器A碗				1.	8.9	1.3	7.0
1.	8.5	1.0	6.8	16.	15.5	5.7	6.3	8.	8.5	1.1	6.8
2.	8.8	1.2	6.8	土師壺				9.	8.9	1.1	7.1
SD08											
丸底杯				瓦器碗				10.	9.2	1.2	8.2
3.	15.5	3.8		17.	16.1	5.7	6.5	11.	9.7	1.5	7.2
SD10											
土師器小皿				瓦器小皿				12.	8.5	1.1	6.8
1.	9.1	1.3	7.1	瓦器碗				13.	8.9	1.1	7.1
2.	9.2	1.2	7.1	20.	9.9	1.6	7.0	14.	9.2	1.2	8.2
3.	9.2	1.4	7.4	21.	10.8	1.6	(7.0)	15.	9.7	1.5	7.2
4.	9.4	1.4	7.1	SD10				16.	8.5	1.1	6.8
5.	8.4	1.2	6.8	土師器小皿				17.	8.9	1.1	7.1
6.	8.8	1.1	7.0	SD10				18.	16.3	5.6	(6.9)
7.	9.0	1.1	7.6	瓦器碗				19.	16.3	4.8	6.7
8.	9.2	1.1	7.1	22.	8.8	1.1	5.8	20.	16.3	4.8	6.7
9.	(9.8)	1.9	6.0	土師器杯				21.	16.3	4.8	6.7
10.	9.6	1.4	4.1	SD10				22.	16.3	4.8	6.7

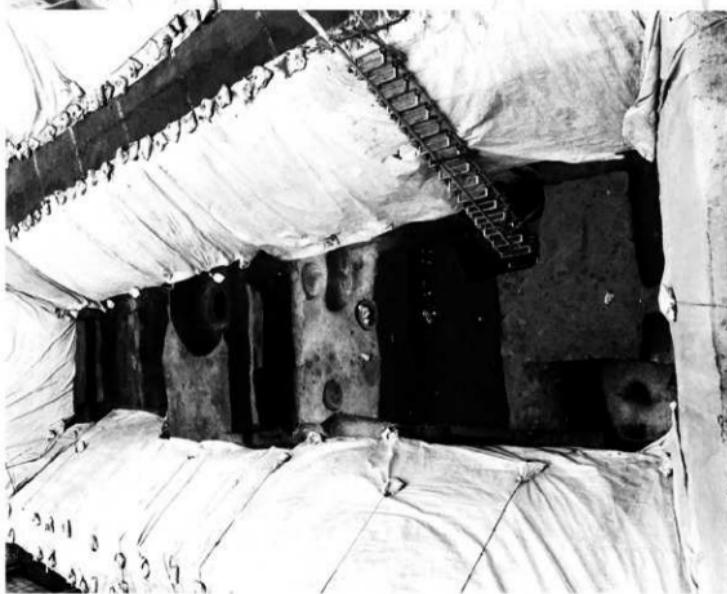
第1表 出土土器計測表

図 版

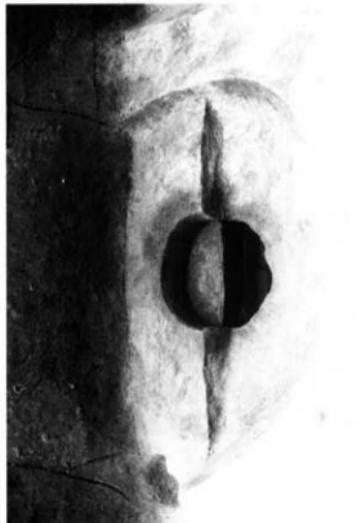
(2) 博多道路群第 103 次調査Ⅲ層上面全景（北西から）



(1) 博多道路群第 103 次調査Ⅰ層上面全景（北西から）



図版2



(1) 調査区東壁面土層① (南西から)



(3) 調査区西壁面土層① (北東から)

(2) 調査区東壁面土層② (南西から)



(4) 調査区西壁面土層② (北東から)

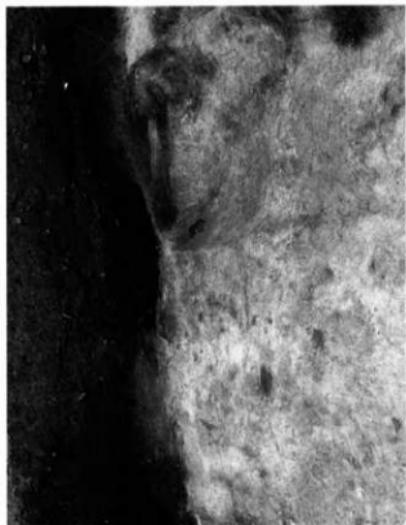


(1)Ⅲ層上面ピット状遺構（北東から）



(2)SD 18溝（南西から）

図版 4



(2) S E 06#戸土層（北東から）



(4) S E 15#戸土層（北東から）

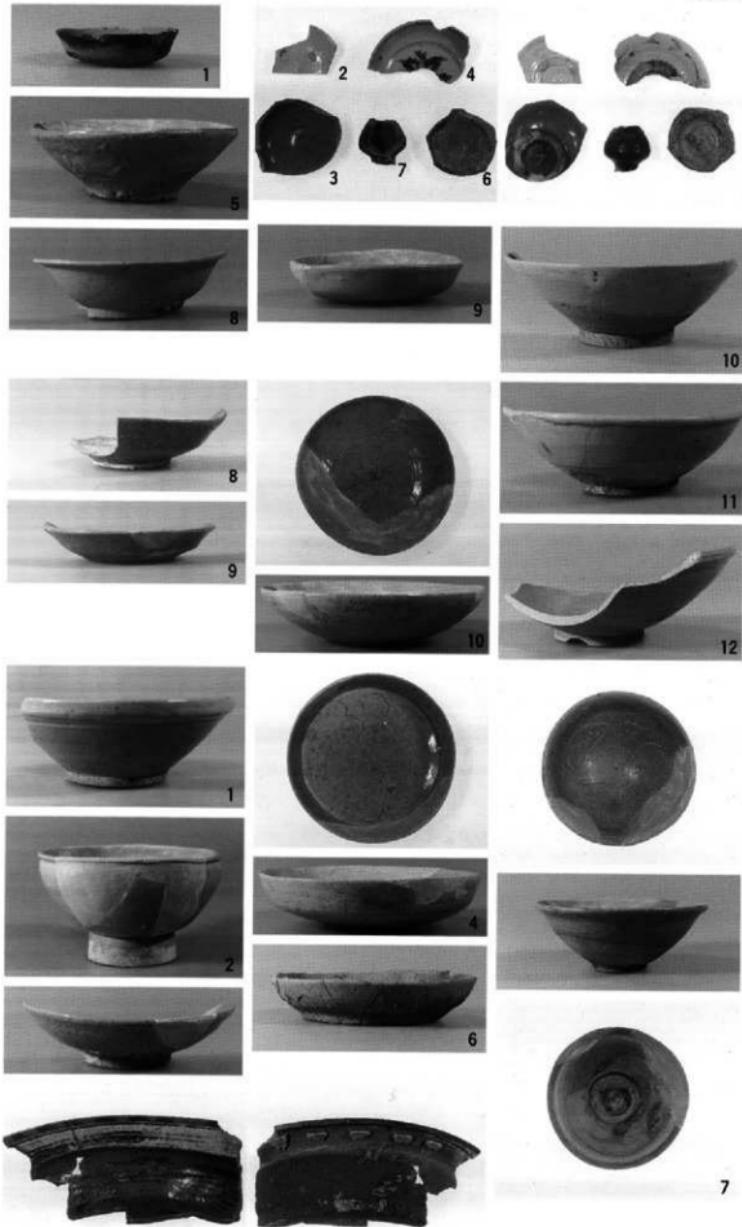


(1) S E 06#戸（北東から）

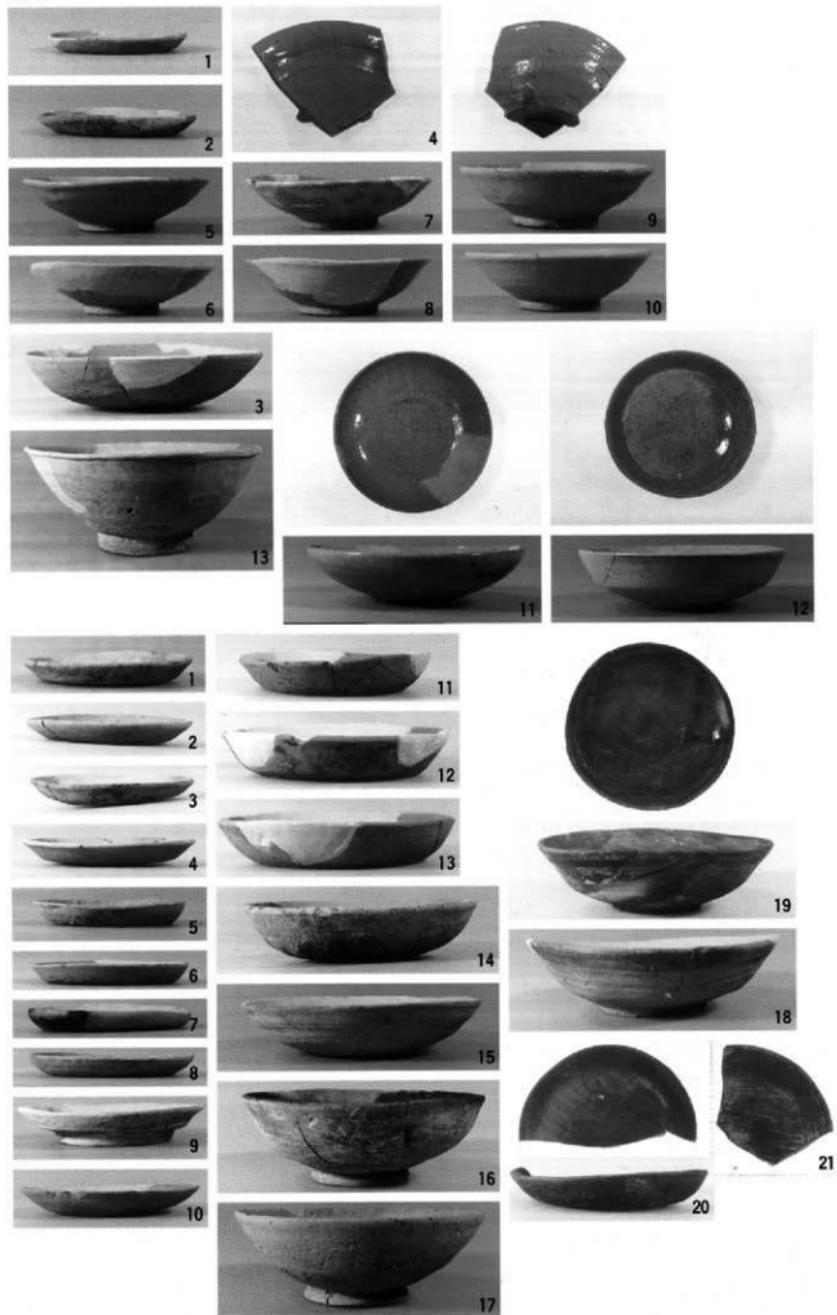


(3) S E 15#戸（北東から）

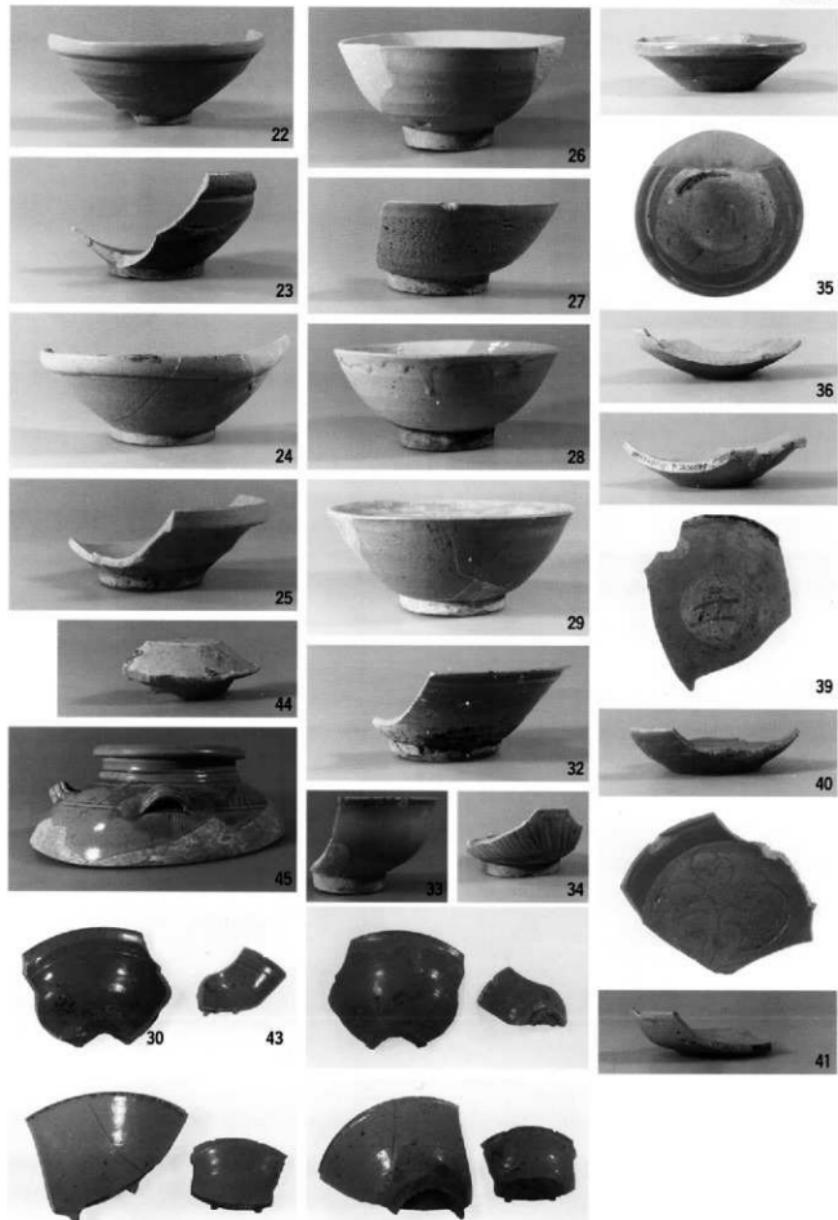
図版5



図版6



S D07出土遺物・S D08出土土器

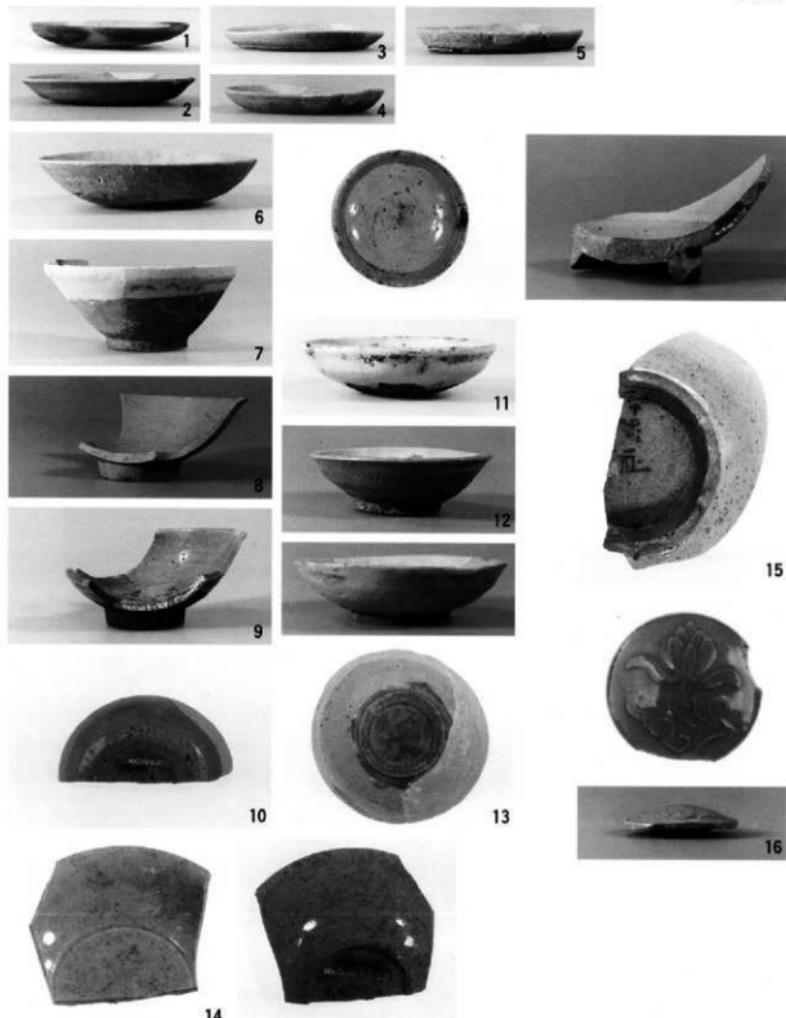


S D 08出土陶磁器(1)

図版 8



S D 08出土陶磁器(2)・S D 10出土遺物



包含層出土遺物

図版10



20



17



21



18



19



22



23



1



3



2



4



5

包含層・その他の遺構出土遺物・瓦

博多 69

—博多遺跡群第103次発掘調査報告—

2000年（平成12年）3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 有限会社筑紫印刷

福岡市東区社領3丁目8番7号
